

関谷兵内が描いた新発田藩

～或る役人の仕事を通してみる江戸時代～

ごあいさつ

新発田藩士せき や ひょうない ふみたかの関谷兵内都高は、江戸時代末期から明治4年に廃藩されるまで、郡方郡廻り役として勤務した役人です。現代でいえば、工事現場担当の技術職にあたります。兵内は藩内の農業用排水路の開削の手配や、河川堤防の保護、水害の復興や記録を行っていました。これに伴い、藩が開発した水路や、水害で破損した河川堤防の詳細な図面、領内の地図を作成していました。また、作図能力を見込まれて当時の国際情勢を把握するために、出版物の世界地図を手描きで写しています。これらの資料を通して、藩の水田開発・洪水対策・開国前の情報収集の姿をみることができます。最後に本展の開催にあたり、貴重な資料をご提供いただいた関谷兵内ご子孫の方々をはじめ、ご協力いただきました皆様に心からお礼申し上げます。

1. 関谷兵内をめぐる資料

当館は①関谷家のご子孫から寄贈された古文書・絵図類、②関谷家以外の藩関係者から寄贈された資料で、関谷兵内の名が記された文書・絵図、③当館利用者の収集家が入手し、関谷兵内を含む新発田に関係が深い資料として寄贈された古文書類を所蔵しています。このうち、③には明らかな混入品を含むため、これらは整理の段階で除外しています。また、新発田藩には関係するものの、年代が兵内の時代よりも遡るものが少量含まれ、これについても今回の展示対象としませんでした。

明治6(1873)年に作られた「士族名寄帳」によると、関谷兵内は文化10(1813)年に生まれ、天保9(1838)年に25歳で家督を相続しています。幕末の禄高は30石取り。安政3(1856)年に作られた「新発田藩武鑑」に「郡廻り」と記され、明治元(1868)年の城下絵図では西門の西方、片町に兵内の自宅、天保年間頃に作成された「一步一間歩詰惣絵図」に西門前の西ヶ輪通りに郡方役所が記されています。関谷家から提供された家譜によると、初代は寛保2(1742)年に没し、天保9(1839)年に没した第4代信定の養子として都高が伊藤家から入り第5代を継いでいます。また、兵内には36歳下の弟、関谷剛内がいて、剛内が14歳の時に写した城下の部分図が残っています。

関谷家から寄贈された郡方関連の「三組樋橋水門寛板堰番付絵図」が天保14(1843)年に作成されています。③の文書のうち、藩の治水に関連する文書は文化14(1817)年から明治4(1871)年までであり、このうち、兵内の名が入っているものは安政3(1856)年が最も古いため、兵内が家督を相続した天保9年頃から安政年間の初め頃には兵内が郡方に勤務するようになり、廃藩直後、明治4(1871)年に新発田県が廃止されるまで、郡方で実務にあたってたとみられます。若い頃の兵内についての記録はほとんどありませんが、③の文書の中に兵内が若き頃に催

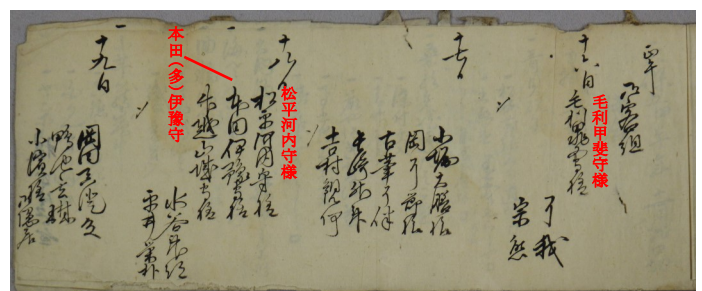
された茶会記が2冊含まれていました。このうちのひとつは当時の新発田藩主10代溝口直諒みぞぐち なおあき すいとう(翠濤)に関わる資料とみられます。

2. 藩主翠濤主催による口切の茶会記

本資料は、天保5(1834)年11月16日から19日の四日間にわたって催された茶会の記録です。口切とは、ひと夏、口に封をした茶壺で保存したその年の新茶を、秋に封を切って取り出し、茶臼で挽いたものを用いて開く茶事のことです。茶道では、一年のはじめりに相当する大切な行事です。

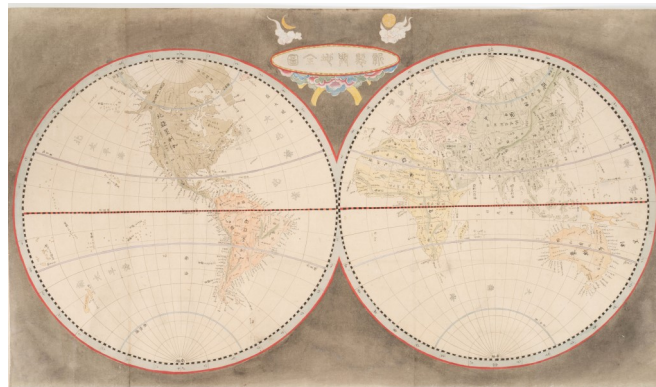
内容を解読すると、招待された客は新発田藩主溝口家と姻戚関係にあった人物、後に十代藩主直諒の子が嫁いだり、養子に入る大名家、江戸に在住する著名な学者や、直諒(翠濤)と茶道を通して交流があった茶人や目利きが名を連ねています。また、使用されていた道具類は、藩の蔵に納められていた大切な茶道具を確認することができるため、翠濤が主催し、江戸で行われた茶会の記録と推察されます。当日の食材を用いる「献立」の内容が記されていないので、事前準備のために作成された記録の可能性がります。

天保5(1834)年は、兵内が21歳のときにあたります。地方



「御口切茶之湯並夜会」天保5(1834)年11月

(16日に「毛利甲斐守」、18日松平河内守、本田伊予守が招待されている)



「新製與地全図」(関谷兵内写)

ると、幕末期には極東アジアに欧米列強が植民地を求めて進出している様子を読み取ることができます。前者は藩主溝口家の「蔵書目録」に「和蘭新訳地球全図」の記載があるため、原本が江戸屋敷の蔵に保管されていたようです。江戸時代後期以降、日本近海に異国船が頻繁に出没するようになり、海外、特に欧米についての情報収集が盛んに行われ、この絵図もそんな背景のもとに写されたとみられます。兵内自身も、その後、文久2(1862)年に新潟湊の山ノ下、松ヶ崎の海岸警備に動員されたらしく、「新潟江異船渡来之為山之下松ヶ崎江御締出役心得書」を記しています。

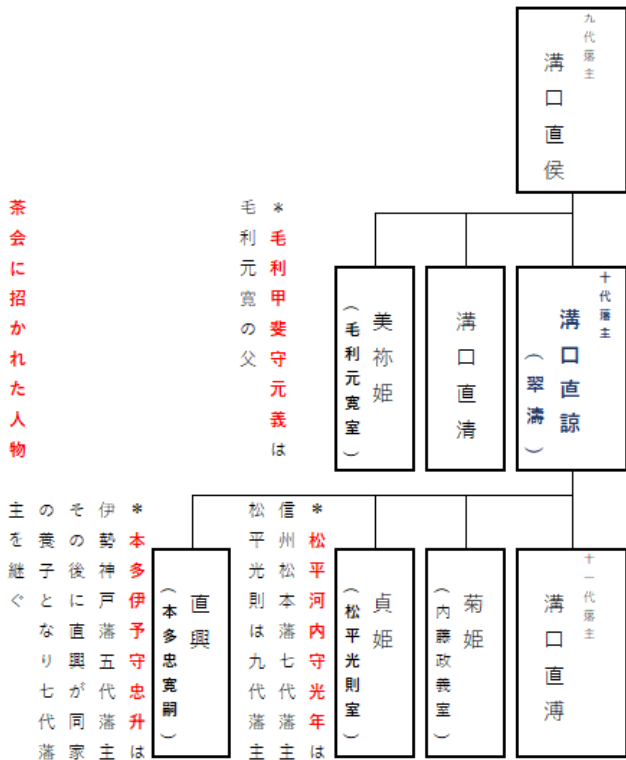
4. 農業用排水路の整備

兵内が世界地図を写す3年前、天保14(1843)年に作成された用水路の配置図が関谷家から寄贈されています。この図は、新発田組(米倉周辺と主に城下町よりも下流)・五十公野組(主に五十公野付近)・川北組(福島潟周辺)の樋・橋・水門・寛・板堰を見回るためにそれぞれの橋や水門に番号を記入した詳細図です。3巻に分けられ、加治川から福島潟までの範囲を流れる用水路と集落から水田へ向かう農道、水源のため池や取水口、堰の位置が記されており、当時の水田景観を詳細に把握することができます。また、「古吉嶋郷形絵図」には、「関谷都高」の署名が残っており、③の文書群に現在の新潟市の上所・近江付近の水門や樋を敷設するための文書(弘化5(1848)年3月)、信濃川下流と中之口川に挟まれた低地付近の農業用排水路の水樋を伏せ替えるための文書(嘉永2(1849)年5月)があるため、弘化年間の後半には、兵内が郡方の役人として、上記の図と照らし合わせながら、水路の改良工事を行っていたことがわかります。



「小吉嶋郷形絵図」(関谷兵内写)

茶会に招かれた人物

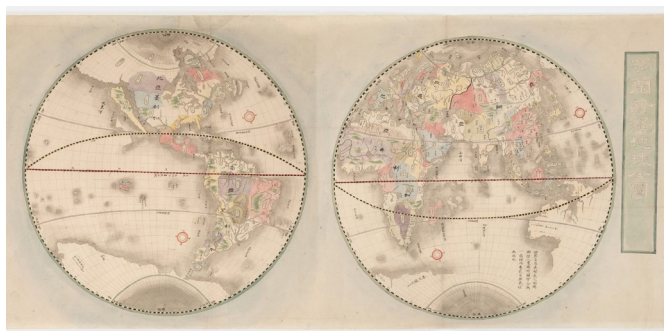


茶会の招待客と溝口家の関係図

の武家社会では、元服後、家督を相続するまでの間、藩主に従って江戸へ参勤し、一定期間江戸詰めとして藩主の警護や身の世話をする傍ら、武道や学問の研鑽を積むことがあります。兵内が江戸へ行った記録は確認されていませんが、江戸で見聞を広め、作図の技術を学んだり、藩主に接する機会を得て、茶会の手伝いに動員されたり、藩の蔵に納められた書物や、物品の整理に携わっていた可能性があります。後年兵内が写した「おらんだしん 囑蘭新譯地球全図」も江戸にあった藩の「蔵書目録」に記録されているため、この時、世界地図を写すなどのきっかけがあったのかもしれませんが。

3. 世界情勢の俯瞰と異国船来航

兵内は弘化3・弘化4(1846・1847)年に二つの世界地図を書き写しています。前者は仙台藩の蘭学者大槻玄沢が刊行に携わった「しんせいよちぜんず 囑蘭新譯地球全図」、後者は玄沢の子の清崇が携わった「おらんだしん 新製與地全図」です。この二つの世界地図は前者が江戸時代の初め頃、後者が江戸時代の終わり頃の世界情勢を示しており、両者を比較す



「囑蘭新譯地球全図」(関谷兵内写)

新発田藩は水害対策のために数多くの河川改修・開削工事を行ってきました。このうち、もっともよく知られるものに、享保15(1730)年に阿賀野川で行われた松ヶ崎の開削工事があります。この工事は、当初加治川・阿賀野川からあふれた水を流す計画で掘削した放水路が、大量の雪解け水により大幅に川幅、川底がえぐられ、そこが新たな河口になりました。川の水位が下がったことで、干拓などの新田開発が飛躍的に進んだ半面、結果として様々な弊害も発生しました。そのひとつが福島潟と阿賀野川の間にあたる岡方組の水田で灌漑用水が足りなくなってしまうことです。そこで計画されたのが新江用水路の開削工事です(南1998)。享保19(1734)年、現在の阿賀野市渡場で阿賀野川から取水し、新潟市北区新崎で新井郷川へ合流させました。阿賀野川と並行する6里28町47間(約26.7km)の水路が掘削されました。兵内が安政4(1857)年に描いた「新江用水掘割図」は、渡場から新崎に加え、途中窪河原から大通川を経て福島潟へ至る5里14町15間(約20.9km)の完成した新江用水が描かれています。ここには水路の幅や周辺の集落、橋や堰、取水口と用水、樋と悪水(排水)などが詳細に描かれています。これらの多くは、木製から鉄・コンクリートに置き換わりましたが、同じ場所で現在の景観に引き継がれています。

また、新規に造成した用水路を比高差が高い水田に導水するにあたり、既存の河川とは高低差が生じるため、保田町から流れる海老澁川の下を暗渠で通し、駒林村地内の駒林川の上を流れるよう^{かほり}管を設けています(ポスター写真参照)。海老澁川は流路が狭くなるなどの支障が生じ、宝暦2(1752)年に下を通る樋管が破損した際、復旧は海老澁川を樋管で新江用水の下を通すように改良しました。すると、今度は海老澁川が滞水する原因となりました(廣田1997)。

5. 水害の復旧と対策

安政4(1857)年5月の集中豪雨により、加治川が島潟地内で決壊し、あふれた土砂が流れ出しました。兵内は、決壊から堤防が復旧されるまでの様子を詳細に描いています。そこには決壊直後の様子(上段)、破堤範囲が最大に広がったとき(中段)、堤防を作るまで(下段)に分けて表示し、下段についてはさらに分割して、杭を打ち水勢を弱める、土俵・石俵で仮の堤防を築く、本堤防を築き、仮堤防との間を埋めるなど、工程ごとの復旧の様子が示されています。

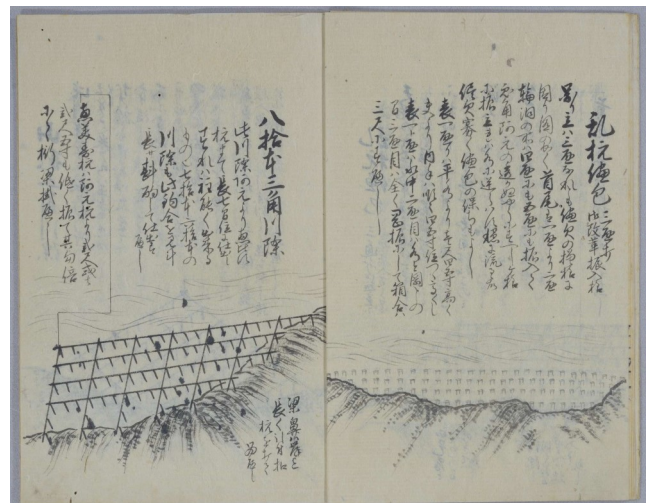
加治川水害の経験^{かわけししょうたいこうごころえ}を踏まえ、兵内は2年後の安政6(1859)年1月に「川除仕様大綱心得」を著します。この中で堤の修復や管理は土地を豊かにするための基本であると述べています。また、以前から伝えられている補強の技術を記し、さらに、新たな手法を加えることで、役割を果たすことができると、図解入りで堤防の管理・補強の方法を述べています。その具体的な方法として、川の中に杭を打って相互に繋げる方法、蛇籠(石などを入れた竹籠)を投入する方法、杭や蛇籠を粗朶や萱、座板を用いて固定する方法などをあげ、それらを水量や流勢に応じて使用することが詳細に記されています。なお、後に本書は、国土交通省水管理国土保全局により「河川に関する伝統的な技術書」のひとつに選定されています。また、安政4年11月に阿賀野川河口付近の「鷺島御普請日記」を記し、河口付近の治水工事に携わっています。



「新江用水掘割図」(分田堰付近)



阿賀野市祥雲寺脇分田堰付近の新江用水



川除仕様大綱心得

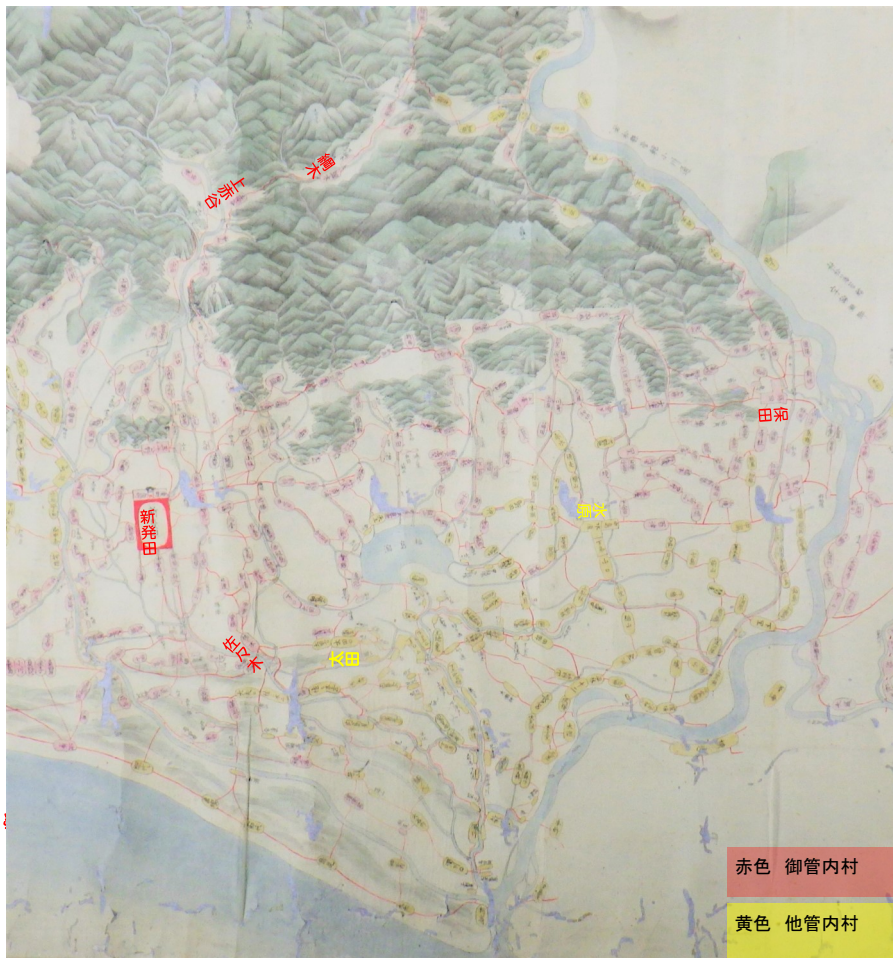
6. 最後の新発田藩領域地図の作成

郡廻り役人として藩内を見て廻る機会が多かった兵内は、文久2(1862)年に中下越後絵図を作成します。これは、縦183cm横477cmにおよぶ大作で、手前側が日本海、奥が越後山脈となる様に鳥瞰図の形式で描いています。この描き方や主尾根線を正面から、支尾根線を左右に描く山の表現などが、新津を中心に活動した江戸時代中後期の測量家小泉其明が文化14(1817)年に作成した「越後全図並びに佐州図」と類似しており、作成にあたって参考にしたと推定されます。

その後、明治維新を経て兵内は明治4(1871)年6月に「新発田藩管轄郷村絵図」を作成します。ここにはかつて図化した新江用水の様子が橋や寛などの詳細箇所も反映されています。管轄図は見附から藤塚浜までの範囲が示され、版籍奉還後の管轄域として、見附・加茂・新津、保田から福島潟の東岸、藤塚浜・相馬に加え、旧新発田藩領ではない五十嵐川上流域や赤谷・綱木の範囲が「御管内村」、三条、信濃川と中之口川の間、水原・福島潟の西岸から太田(新潟市北区)までの範囲が「他管内村」と記され、旧新発田藩領だった中之島組・鶴森組・赤浜組はそれぞれ「元」が付されています。これは、版籍奉還後、明治新政府の出先機関(水原県→新潟県)の主導により行われた「村替え」の結果が反映しているためで、同年7月に新発田藩が廃され、新発田県が成立します。いわば、この図は新発田藩の最後の範囲が示されているといえます。

③の中に残っていた古文書で郡方の業務に関するものは明治時代以降に作られたものも多くありました。

この中には村替えによって旧村松藩から新発田藩へ編入された遅場村(三条市の五十嵐川上流域)のから文書や、新発田藩から水原縣に編入された新飯田村(新潟市南区)からの文書などがあり、明治維新後、新潟県の領域が確定するまでの混乱の様子がうかがえます。明治4年の9月に兵内あてに作られた用水路改修工事の見積書が最も新しい郡方関連の文書であり、新発田藩・新発田県が解体されるまで、兵内は淡々と農地の整備・河川の修繕の仕事を行っていたことがわかります。



新発田藩管轄郷村絵図(新発田城下周辺部分)

参考文献

浅倉有子・岩本篤志・原直史2013『新発田藩道具帳集成』新潟大学人文学部原直史研究室

斎藤寿一郎1980「築堤と防水活動」『新発田市史』上巻新発田市史編纂委員会

戸出一郎2002「医学館における医学考試について(二)」『日本医史学雑誌』四八巻二号

南憲一1998「治水の進展」『豊栄市史』通史編 豊栄市史調査会

宮武慶之2014「新発田御道具帳にみる溝口家旧蔵の茶道具」『文化財情報学』9巻2号

宮武慶之2019『知られざる目利き白酔庵吉村観阿』淡交社

廣田康也1997「新江用水」『安田町史』近世編三 安田町

令和3年度 新発田市立歴史図書館 秋季企画展

「関谷兵内が描いた新発田藩

—或る役人の仕事を通してみる江戸時代—」配布資料

執筆・鶴巻康志(新発田市立歴史図書館)

編集・発行:新発田市立歴史図書館

新潟県新発田市中心4-11-27

刊行 令和3(2021)年10月9日